JA足利
（足利市農業協同組合）

営農情報

2023年
5/1

1　麦類の生育状況と今後の管理について

本年産のビール大麦の生育は茎立期まで平年並みで推移しましたが、３月の気温高の影響により、出穂期は平年に比べて早まりました。今後の気温は高い予報のため登熟も早まると予想されます。麦の生育を良く確認し、赤かび病の防除、収穫作業を適正に行い、高品質麦の生産に努めましょう。また、大雨に備えて明渠の点検・補修を行いましょう。

⑴ビール大麦

発芽勢の確保のため、適正な収穫作業を行いましょう。

◎早刈り厳禁
収穫適期：８割の穂首が９０度以上曲がった頃（穀粒水分２５％以下）
生育ムラがある場合：収穫日を通常の生育よりも1～３日遅らせるか、刈り分けを行いましょう。
◎適正な収穫作業
コンバインの掃除を徹底的に行いましょう。回転数は稲よりも１割遅くし、裂皮や剥皮が発生しないか確認しながら作業しましょう。

⑵小　麦

圃場を観察し、防除適期を逃さないようにしましょう。

◎赤かび病の追加防除（２回目）
1回目散布（開花始め）の２０日後に２回目の薬剤散布を行いましょう。
同系統薬剤の連用は避け、収穫前日数に注意して薬剤を選びましょう。

⑶食用大麦（もち絹香）

ビール大麦（ニューサチホゴールデン）と比べて穂発芽しやすいので、刈り遅れないようにしましょう。

◎適期収穫
収穫適期：８割の穂首が６０度以上曲がった頃（穀粒水分３０～２５％）
※ニューサチホゴールデンに比べて２日程度収穫が早くなります。

2　水稲育苗のポイント

⑴種子消毒

・未消毒種子を購入した場合、種子伝染性病害の防除のため、種子消毒を必ず行いましょう。
・消毒中、種籾袋を２～３回上下に撹拌し、種子を完全に浸漬します。
・消毒液の使用は１回限りです。繰り返し使用しないようにしましょう。

○種子伝染性病害虫に適用のある主な種子消毒剤　（令和5年4月3日時点の登録）

農薬名	希釈倍率	水20L当たり使用量（24時間浸漬する場合）
テクリードCフロアブル	200倍	100ml
スミチオン乳剤	1,000倍	20ml

⑵適切な浸種・催芽

・浸種は、積算温度１００～１２０℃（消毒種子は１２０～１３０℃）程度で行ってください。
・低温備蓄種子はしっかり吸水させるため、浸種時間を１～２日長くとる。
・催芽は、２８～３０℃で１８～２０時間、ハト胸程度に均一になるようにする。

浸種時間の目安

種子	水温13℃の場合の浸漬日数（積算温度）
未消毒種子	8～9日（100～120℃）
消毒種子	9～10日（120～130℃）
低温備蓄種子	9～12日（120～150℃）

（裏面あり）

◎詳しくは安足農業振興事務所、経営普及部（TEL 0283-23-1431）、JA足利営農指導員・営農相談係TAC（営農経済渉外）にご相談下さい。

⑶適正播種量

播種は薄播き（箱当たり催芽籾１３０ｇ）でがっちりとした苗を作りましょう。

⑷播種後の管理

徒長やムレ苗発生防止のため温度管理や、過剰なかん水に注意しましょう。

		展開後1～4日(緑化期)	5～15日	15日～
温度管理	日　中	18～25℃(30℃以上にしない)		
	夜　間	10℃(最低5℃以上)		5℃～7℃以上
かん水	かん水量	2日に1回 極度に乾燥した時以外は控える	1～2日に1回 控え目のかん水に努める	1日1回 午前中十分に
	注意事項	・かん水量が多すぎると苗が徒長し、根の生育不良を招く。 ・低温時のかん水は午前中に行い、夕方のかん水は行わない。 ・夕方、苗箱の表面が乾く程度が最適です。		晴れの日はたっぷりと、 曇りの日は控えめに。

3　いもち病の防除について

近年、７月の低温･日照不足によりいもち病の発生が各地区で確認されています。特に中山間地や移植時期の遅い「あさひの夢」で被害が増加しています。

いもち病の防除は、種子消毒や箱施用剤で予防効果が高く、本田で防除する場合は、発生予察情報（栃木県農業環境指導センター BLASTAM）を参考にして、適切な時期に実施することが重要です。

○いもち病に適用がある箱施用剤　（令和5年4月3日時点の登録）

農薬名	使用量	使用時期	使用回数	使用方法
ルーチンアドスピノ 箱粒剤	育苗箱1箱当たり50g	播種時(覆土前)～移植当日	1回	育苗箱の上から 均一に散布する。
ブーンパディート 箱粒剤	育苗箱1箱当たり50g	播種時(覆土前)～移植当日	1回	育苗箱の上から 均一に散布する。

4　稲こうじ病の防除について

イネ稲こうじ病は籾に暗緑色の病粒を形成する病害で、この菌による被害粒の混入が確認されると農産物検査で規格外になってしまいます。病原菌は土壌で越冬するため、以前発生した圃場では防除を行いましょう。また、多肥栽培で発生が助長されるので、適正施肥を行いましょう。

○移植期の防除薬剤（シメコナゾールを含む）　（令和5年4月3日時点の登録）

農薬名	使用量	使用時期	使用回数	使用方法
トリプルキック 箱粒剤	育苗箱1箱当たり50g	移植3日前～移植当日	1回	育苗箱の上から 均一に散布する。

※シメコナゾールを含む農薬の総使用回数は２回以内（移植時までは１回以内）であることに注意。
※トリプルキック箱粒剤はウンカ類に登録がないので、コシヒカリ等のイネ縞葉枯病に罹病する品種を作付けする場合は、別途イネ縞葉枯病対策を検討する。